

大量発生 of 剪定樹木、枝と分離

府立大の米林教授ら技術開発

鉢植え
など

有効利用に期待

葉を良質たい肥に

剪定した樹木の枝葉を分離してたい肥として利用する技術を、京都府立大農学研究所の米林甲陽教授（土壌化学）と大阪の造園業グリーンリサイクルが開発した。街路樹や公園緑化樹の枝切りで毎年大量に発生する枝葉の有効利用が期待される。たい肥は「生きた葉」を使うために養分が豊富なうえ、重量も土に比べて約三分の一と軽く、鉢植えの販売などに便利だという。

収集した枝葉を三〜五分に破碎し、枝と葉に遠心分離する。このうち葉

少ないという。枝は木炭の原料に使う。

だけを半年近く発酵させると、リン酸やカリウムを大量に含む腐葉土ができる。肥料を加えなくても野菜や草花の栽培に使える養分を持ち、土を使わないため病気の恐れも

緑化樹木の剪定は主に自治体の業務だが、枝葉は生木で重く、焼却にも時間がかかるなど環境への問題があった。このため、枝葉を一緒に粉碎して肥料化する方法も一部で用いられているが、今



街路樹のたい肥で育てた野菜を調べる米林京都府立大教授（右）ら